資料3

IPM実践農業者の紹介

徳島県阿波市
和 田 元 治 さん

1

和田さんのプロフィール

- 氏　　名:　　和　田　元　治
- 栽培拠点:徳島県阿波市土成町
- 主な栽培作物:ミニトマト　約30a
  水稲　　約59a

- 栽培地域の特徴:
  吉野川中流域に位置し、トマト、イチゴ、メロン等の園芸栽培が盛んに行われている

2

IPMに取り組むきっかけ

- 昭和63年：県内食品企業を退職、レタス専業農家となる
- 平成３年：年間労働時間の平均化、販売収入の周年化を図るため、レタスをやめてミニトマト（促成長期どり）を導入
- 平成５年：管理作業の軽労働化、環境に優しいミニトマト栽培を目指して、マルハナバチや天敵（オンシツツヤコバチ等）の試験導入し、自宅圃場で実証

試行錯誤の末、５年がかりでミニトマト促成栽培でのIPM技術を確立

促成作型では春以降は茎葉が繁茂するため、薬剤散布やホルモン処理は困難であり、マルハナバチや天敵を導入せざるを得なかった

3

IPM実践のポイント

病気を予防するために

- 作付け前に1ヶ月程度、施設内を湛水状態に保つ
- 夏秋作では畝面を紙マルチで被覆
  （地温を上げないことで青枯病を予防）
- 誘引は斜め誘引とし、不要な下葉や隣接株と触れ合う葉を早めに切除し、風通しをよくする
- 湿気がたまらないよう、天候に応じてハウスサイドの開け閉めをこまめに行う
- 灰色かび病の予防としてバチルス　ズブチリス剤（ボトキラー）を処理

4

IPM実践のポイント

害虫を管理するために

- 防虫ネットを施設開口部に展張
  （0.2～0.4mm目合い防虫ネットを循環扇とともに利用）
- 天敵昆虫の放飼
  （オンシツコナジラミにはオンシツツヤコバチとサバクツヤコバチ、トマトハモグリバエにはハモグリミドリヒメコバチを利用）
- 選択性殺虫剤を利用
  （脱皮阻害剤、チェス水和剤、プレオフロアブル、オレート液剤等の気門封鎖剤）オンシツツヤコバチを放飼した場合にはコナジラミ成虫の発生に注意し、選択性殺虫剤を早めに散布
- 土着天敵の利用
  （ハウス内隅に生えるオオアレチノギク等にナモグリバエが発生放置しておくとトマトハモグリバエにも寄生する土着の寄生蜂が発生）

5

今後の課題

- タバココナジラミバイオタイプQや黄化葉巻病の対策：
  黄色粘着テープの利用、オンシツツヤコバチからボーベリア菌製剤（ボタニガード）や新たな天敵（チチュウカイツヤコバチ）に変更
- 葉かび病の対策：
  目合いの細かなネットを展張すると湿度管理が難しい

6

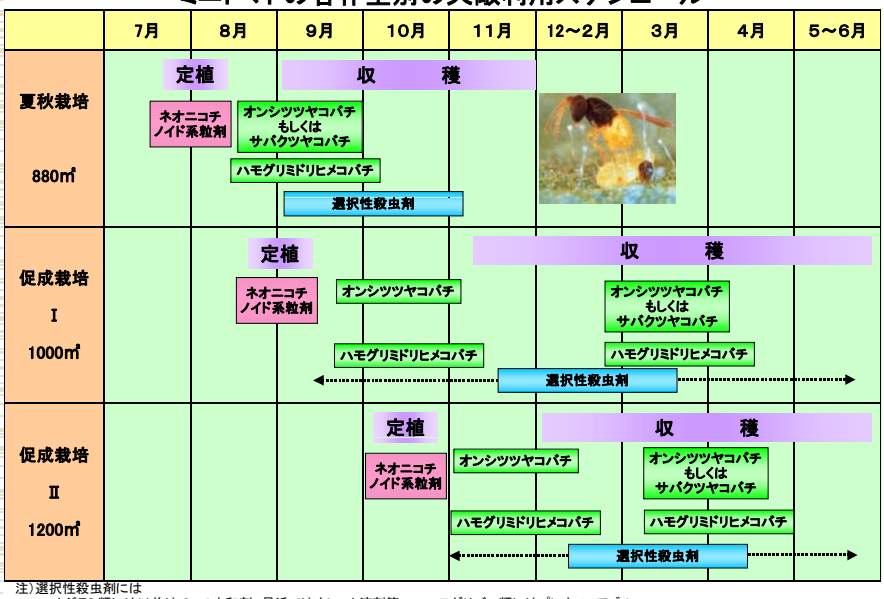
おわりに

- 以前は県認定エコファーマーマークを付けた生産物が地元スーパーで取り扱われた
- 現在はほとんどを市場出荷に
- 減農薬栽培による有利販売よりも、

<u>IPM技術により生産の安定性、持続性を目指したい</u>

7

ミニトマトの各作型別の天敵利用スケジュール



注）選択性殺虫剤には
コナジラミ類には以前はチェス水和剤、最近ではオレート液剤等、　ハモグリバエ類にはプレオフロアブル、
トマトサビダニにはコロマイト乳剤、マイトコーネフロアブル、
蛾類幼虫には脱皮阻害剤、BT剤、プレオフロアブル等
を利用している。

8